きみノこえ

芳田尚哉

三ヶ月――

それは長いのだろうか、短いのだろうか。

それは一瞬のようであり、
永遠のようでもある。

その時間を精一杯生きた。だから、短くはなかったと思う。

それでいい。

指で作ったフレームで空を切り取る。
切り取られたどこまでも続く空間。彼女はそこにいるのだろうか。

同じ空を見ていますか？

☆

携帯を耳に当てる。
『もしもし』
〝もしもし、どうしたの？　久しぶり〟
『ちょっと、さ』
言いよどんでしまう。特に理由はないのだ。それがなんだか恥ずかしい。
〝どうしたの？〟
『いや、別に。それよりさ、元気してた？』
〝どうだろう……？　そっちは？〟
『どうだろう』
なんだか変な会話かも。
ふと風が通り過ぎていく。
ゆっくりと歩を進める。御影石が立ち並ぶ中をゆっくりと移動していく。
近くにある竹林から聞こえる葉の音が妙に涼しげだ。
〝なに、それ〟
『まあ、ぼちぼちって感じじゃないの？』
〝そんなもの？　まあ、別にいいけど〟
『そういう事』

〝適当だな……〟
『適当が一番だって』
〝もうちょっと真剣になってもよくない？〟
『それはなんか自分じゃない気がする』
〝そうかな……？　じゃあ、どんなのが自分なわけ？　やぱり、適当？〟
『それはそれで失礼だと思うけど』
〝そんな事ないって〟
『そんな事あるから』
〝そこは適当じゃないんだ〟
『だから、なんでもかんでも適当なわけじゃないんだって』
〝そう？　で、どういうのが自分なわけ？〟
『うわっ、まだその質問生きてたんだ』
〝適当じゃないんなら答えてみなさいよ〟
『えっと……空を見上げる事かな』
〝……はい？〟
『だから、空を見上げる事が自分かなって』
〝ごめん。その詩的っぽい表現は理解できないんだけど〟
『手でフレームを作ってさ、空を見上げるのって……なんかよくない？』
〝手でって……最初に会った時もしてなかったっけ？〟
『してたしてた』

　そう、彼女と初めて出会ったのはあの白い建物の屋上だった。
　全面が――というか、上まで本当に全部がフェンスで囲われて、まるで檻の中に閉じ込められているようだった。あながち間違いでもないのかもしれないけど。
　そんな檻に囲われた世界にいた。
　そんな世界で、彼女は両手を広げ全身で風を受けていた。まるで鳥――いや、風そのものだった。
　長い髪を風に任せている。ゆったりとした薄桃色の寝間着が彼女を妖精に見せている気がする。
　その姿を指で作ったフレームにおさめて見惚れてしまっていた。時間が――世界が止まっていたんだと思う。他にはなにも見えなかったし、聞こえなかった。だから、凝視してしまっている事に気付かなかったんだ。
　彼女と目が合った。
　合ったというかバッチリ見つめ合っている。
　思わず後ずさって転びそうになった。
　そこでやっと気がついた。
　ずっと彼女を見ていたんだ、という事に。

　驚いてあたふたしているのが可笑しかったのか、彼女は口許に手をあてて、くすくすと笑っていた。
　思わず苦笑いを返してしまう。
　え、えっと……。
　どうしていいものやら、頭の中がぐるぐるしてて真っ白で……。
　とにかくわけがわからなくなってしまっている。
　そんな自分などお構いなしで彼女は、どうしたの？　と言って近づいてくる。
　思わずダッシュで立ち去ろうかと思ったが、幸か不幸か足が動かない。いや、足どころか全身が金縛りにあったように動かない。
　そのくせ、頭の中はぐるぐるで真っ白だし。どうしていいのか考える事もできない。
　わかった事はひとつ。心臓がドラムのフットペダルを踏んでいるみたいに響いている。
　彼女は笑顔でさらに近づいてくる。
　こうなれば覚悟を決めるしかない。
　それにしても、なんの覚悟だろう？
　えっと……。
　そう――彼女と話す覚悟、か。
　今までに女の子と話した事なんかざらにある。あるのに……どうしてここまで緊張してるんだ？
　あ、そうか。彼女をじっと見ていたのが後ろめたいのか。だからこんな気持ちなのか。
　そこまでなんとか考え至るのと、彼女が、ねぇ？　と声を掛けるのが一緒だった。
　だから、思わず仰け反ってしりもちをついても仕方ないだろ？
　それが可笑しかったのか、彼女は遠慮なく笑っていた。手で隠すなんて事はなく、見ているこっちも気持ちいいくらい。……少し傷ついたけど。

　さて、こんな出会い――初対面はよかったのか悪かったのか。おそらく前者だろう。そう思いたい。
　最初に醜態を晒したものだから、次から会う時はなんだか楽だった……気がする。
　お蔭様で見栄なんて言葉とは無縁だった。

〝もしもし、どうしたの？〟
　そんな事を思い出していたものだから会話がそっちのけになってしまっていたらしい。
『いや、ちょっと初対面の時の事を……』
〝ああ、あれ。可笑しかったよね……〟
　言い終わる前に言われた。
　憶えていてくれたのは嬉しいんだけど、あまり憶えていて欲しくなかったりもする。矛盾なんだけど。
　目的の場所へ歩を進めながら、彼女との会話を続ける。

『頼むから忘れてよ』
〝無理だよ。ずっと憶えているんだ〟
　意地悪そう……というか意地悪だ。
　だけど、それも嫌じゃないのは色目だろうか。
〝それはそれとして、さっきの話だけど、答えになってない気がするんだけど……〟
　えっと……どんな話をしてたっけ？
　ちょっと思い出す。
　ああ、なにが自分かって事だっけか。
　そこから手でフレームを作って云々から、初めて出会った時を思い出してしまったんだ。
『そう？』
〝うん。だいたい、話自体が噛み合ってる感じがしないのは気のせいなのかな？〟
『こんなに会話してるじゃん』
〝そうなんだけど……それぞれ話してるだけで、これって会話？〟
『いいじゃない、それでも』
〝やっぱり適当じゃない〟
『それは失礼だと思うけど』
〝失礼もなにも事実だし〟
『非道いな、それ』
〝非道くないって〟
　笑いながら言われても説得力ないよな。
　それも彼女らしいといえばそうなのかもしれない。
　彼女はずっと明るかった。
　悲嘆しているのを見た事がないし、そういう雰囲気すらない。
　そう、それはあの日――初めて会った翌日に再会した時もそうだった。

　初めて会った翌日、また屋上にやって来た。もちろん、また彼女に会いたいと思ったからだ。ここなら彼女に会えると思った。それ以外に理由なんてない。強いて理由を作るなら……暇で暇で他にする事がなかったというのでどうだろう。とにかく、彼女に会いたいと思ったのが一番の理由なんだ。
　屋上に出るとまだ春は少し遠いな……と感じさせる冷たい空気に包まれる。
　昨日よりも暖かくなるとか言っていた天気予報なんてどこへやら、昨日よりも寒いんじゃないか？　と思う。羽織るものを持ってくればよかった。
　そんな事を思いながら屋上を見回すが、残念ながら彼女の姿はない。
　見落としていないかと一周してみるが姿はない。大量に干されているシーツの間にいないかと思って丁寧に見ていくがやはりいない。一応、念のためと思って給水タンクにも上ってみる――が、もちろんいない。そんな所まで捜すなんて我ながらやりすぎだとも思ったが、捜さずにはいられなかったんだから仕方ない。

しかし、確認してしまうと彼女がいないんだという淋しさが猛烈に襲ってきた。
昨日ほんの少しだけ、それもあんな醜態を晒したというのに会いたいなんて変だろうか。
ぼーっとフェンスで囲われた空を見上げる。
空気が澄んでいるのか空が高い。
どんなに手を伸ばしても雲に手が届きそうにない。
彼女との距離もこんなものなのかな……。
そういえば名前も知らないや。
昨日はどうやって別れたんだっけ？
パニック状態で全然憶えていない。
なんとなく、ひたすら黙って見ていた事を謝っていたような気がするんだけど……実際はどんなんだったんだろうね。
はぁ〜っと大きなため息を吐いて寝転がる。ううっ、背中が冷たい。
真上にもフェンスが張られた空間はまさに檻の中。壁じゃなくて空が見える分マシなのかもしれない。
たった二日でこんな気分になるなんてな……。
確かにちょっと前まではここよりも自由だったけどさ。こんなフェンスに囲われていなかったし、自由に動き回れたけど。
結構、順応できるものだと思っていたけど……って、まだ二日か。
いや、屋上に来れるようになるまでを含めると十日か。
そろそろ慣れるだろう。そのうちさ。
これまでの八日に比べれば随分と自由になったんだから……って、中途半端に自由だから余計にこんな風に感じてしまうのかもしれないな。
っていうか、こんな事を考えて時間を潰さなきゃいけないってのもなんだかな……だよな。
かなり不自由な生活だったからな……。
ホント、ちょっと前――十日くらい前は、こんな事を考えるなんて夢にも思っていなかった。
こうして空を見上げて寝ているのも案外悪くないかも、なんて思えてしまうんだから不思議。
ある意味、贅沢な時間の使い方なのかもしれないな。
寝転んだまま指でフレームを作ってフェンス越しの空を切り取る。
風がほとんどないので雲はまったくといっていいくらい動かない。自由に見えて自由じゃないんだよな、あいつら。自分じゃ動けないんだから。
それにしても、変わり映えのない景色。
こっちはここから出れないんだから、せめて空くらい変わってくれてもいいのにな……と思うのだが、それってやっぱり無理な注文なんだろうか。
流れやがれ、雲。
と、心の中で叫ぶ。
退屈だ……。
せめてもの望みといえば、こうしてフレームを作って覗いていたらまた彼女に会えるんじゃな

いかと――

　なにしてるの？

　会えるんじゃないかと……って、目の前に彼女の顔があった。
　うわっ！　と、地面に手をついて起き上がってしまった。
　目の前に彼女の顔があって、突然起き上がれば当然――素敵、トキメキ、レモンの味が……なんて事はなく、

　ゴチン！

　と、見事な頭突き。
　どこの脚本家が書いたコントだ？
　そうツッコまずにはいられなかった。
〈お約束〉というヤツなのか？
　彼女は、いたたっ、と額を押さえてうずくまっている。
　自分も額を押さえて座り込んでいたりする。
　っていうか、よくもまあ、こんな綺麗に頭突きがきまったな……と、変に感心してしまう。
　普通はもうちょっと顎に当たったり、鼻に当たったり……そんな感じじゃないか？　いや、そんなに頭突きの経験があるわけじゃないけどさ。もちろん、こんなシチュエーションなんて初体験なわけだけど。
　そんな事を考えていてようやく痛みも治まってきた。
　ひとしきり痛みが治まると今度は、ごめんなさい、と、ひたすら平謝り。
　豪快に土下座。
　とにかく土下座。
　それはもう、地面のコンクリートに額をぐりぐりと擦りつけてめりこむんじゃないかというくらい土下座。
　昨日といい今日といい、かっこ悪すぎ。どうしてこうなんだ？　なにかあるのか？
　そう、なにかしらのデビルちっくなものにでも憑かれていたりするんだろうか。でなきゃ、なんだっていうんだ？　ただ不運なだけ？　そんなはずがない。そんな事があっていいはずがない。あってたまるものか。
　もういいよ。
　そう言って彼女は頭の上にそっと手を置いてくれた。
　まさに女神の手だと思った。
　全てが赦されたような錯覚に陥った。
　そんなのは錯覚だ。錯覚に違いない。
　だって、自分が赦されるはずが――赦されていいはずがない。

　こんな醜態を晒したのに。
　ほら、立って――と、彼女は手を差し出してくれている。
　本当に赦されるのだろうか。
　この手をとれば本当に……。
　ああ、やっぱりこの手は女神の手なんだ。
　そっと彼女の手に触れる。
　やわらかくて、
　あたたかくて、
　自分の手とは大違いだった。
　悪い意味ではなく、なんだか人間の手とは思えなかった。しつこいようだが、女神の手のようだった。
　そんな感触がなんだか罪悪感を感じさせた。
　とりあえずそんな感じだったので尚も謝ろうとしたけど、
　なにしてたの？
　という彼女の声に封じられてしまった。
　もしかしたら先読みされていたのかもしれないな……。
　本当に赦されるのかな。だったら嬉しい。
　そんな優しい彼女の質問に答えないわけにはいかない。
　空を見ていたんだ……と、指でフレームを作って空を見上げる。
　彼女も、そうなんだ、と言って同じように空を見上げた。
　なんだか面白いね、と彼女は楽しそうに言った。
　不思議だな……。いつもと同じ風景なのに違う景色みたい。まるで……一枚の風景画みたい――なんて、とても自分には言えないな。
　うん、と返してから、ちょっと素っ気なかったかな……と思って、だからこうして見るのが好きなんだ、と付け加えた。
　それからしばらく、そこに設置されているベンチに並んで座って空を見上げていた。檻越しの空を。

　ねぇ、ここに来たのって最近だよね。
　そんな彼女の声が聞こえるまで、遠い世界に旅立っていたらしい。その声でこちらの世界に連れ戻された。
　遠い世界へ行っていたせいで、彼女がなんと言ったかまではわからなかったので、正直にその事を伝えると彼女はもう一度言ってくれた。ここに来たのって最近なの？　と。
　ここ……というのはこの屋上なのだろうか、それともこの建物なのだろうか。おそらくは後者なのだろうと推測する。なんとなくだけど、本当になんとなくだけどそんな気がした。それ以外に理由はない。
　そういうわけで、この建物に来た事を訊かれているのを前提に、十日ほど前かなと告げる。

すると彼女は、じゃあ私は半年くらい前からだから先輩だね、と楽しそうに微笑んだ。
そうか……自分は後輩なんだ、と少々間の抜けたのんきな考えをしてしまう自分を発見する。
それと同時に、同い年くらいであるはずの彼女が、とても頼もしくたくましく強い人に思えた。
半年という、あっという間なのかもしれないけど、長い時間彼女はここにいる。
この檻の中に……まさに囚われのお姫様だ。
じゃあ、閉じ込めた悪者は誰だ？
そんな疑問に彼女はあっさりと答えをくれた。
私のは、もうずっとだから……。ずっと一緒だから。出たり戻ってきたりの繰り返し。もう慣れっこ。
そんな言葉を明るい声で言われると、たいした事がなさそうに聞こえるが、本当は深刻なのだろう。あまりに深刻すぎて達観してしまっているのだろう。
――なんていうのは勝手な思い込みかもしれないけど。
でも、それももうすぐ終わり。あと三ヶ月くらいだって。
信じられない言葉が続けられた。
なんだろう……。

三ヶ月――

その言葉がずしりとのしかかる。
たった十日ですら長く感じるけど、そんなの本当はあっという間だ。それは三ヶ月でも同じだ。
十日に比べれば長いだけ。それだけだ。
それを彼女はなんでもないかのように言った。
自分ならどうだろう？　言えるだろうか。
考えるまでもない。
冷静でいられる自信は微塵もない。自棄になって暴れているかもしれない。
それを考えると、彼女はすごいと思う。
そんな一言で言い切ってしまうのは悪い気がしたけど、それでもそれ以外に彼女をあらわす言葉を知らなかった。
そんな事を考えていたのを見抜かれたのだろうか、
訊いてもいいのかな？
と前置きして彼女は、あなたはどうしてここにいるの？　と、訊いてきた。
別に隠すような事じゃない。
それ以前に――よくわからない。それが答えだった。
よくわからないのは真実で、少なくともなにも聞かされていない。
そう言うと、彼女は表情を暗くした。

深刻にとられたのだろうか。
きっとたいした事じゃないよ、とは言うものの、どこまでそうなのか、そう伝わるかはわからない。
だから、彼女に話す事にした。ここに来るまでのことを。

橙色の光。
白黒の世界。
足元に散らばるパン屑。
油のこもった匂い。
それが憶えている最後の光景だった。
次の光景は真っ白い部屋だった。そう――この建物の中にいた。

毎日、日が沈むまでの時間、キャンバスに向かっていた。
美術部員ではなく、画家を目指しているわけでもなく、ただの趣味。あくまでも趣味であって、部活として描く気はさらさらなかった。
かといって、絵ばかり描いているわけでもない。
散歩ついでに写真を撮ったりもしていた。別にモデルもなく、ただ綺麗だと思ったものを写していただけだ。
それは空だったり、花だったり、草だったり、木だったり……。自然を撮る事が多かった。街中に人工的に植えられたものまで〝自然〟と呼べるのならだけど。
その時は静物画を描いていた。モチーフはりんご。ありきたりだと言われても別に気にしない。描きたいと思ったから描くだけだし。
誰に強制されて描くわけじゃない。強いて言えば自分に強制されているのかもしれない。
写真も気が向いた時に撮るだけだ。
勝手な自己満足だといわれれば反論はできない。
義務じゃないんだからいいじゃないか、と思っている。
だから、その日もりんごを描いていたんだ。
真っ白なキャンバスに木炭でりんごを描いていく。
この独特な曲線がちょっと難しい。
別に上手いわけじゃないんだ、絵も写真も。どっちも素人だとわかるようなもので、誰かに褒められるようなものじゃない。本当に自己満足なんだ。
そのくせ、道具だけはちゃんと揃えるものだから、この部屋にはきちんとそれなりの道具がある。
宝の持ち腐れ……なんて言われるんだろうな、これ。
自分でも使いこなせていない気がするし。
やっぱり難しいな……。
と、苦戦しながらも目の前のりんごと格闘していた。

昼過ぎから描いているのに、全然描き終わる感じがしない。
どのくらい描いているのかと気になって時計を見ると、もう夕方だった。
それでか……。
さっきから窓の外が橙色なのは。
だから、キャンバスも橙色に染まっていたんだ。
時間を知ってしまうと、途端にやる気をなくしてしまう。集中していると時間なんか気にならないのに、不思議なものだ。この部屋に時計はない方がいいのかもしれないな……なんて思った。

瞬間。

目の前が真っ白になった。

というわけなんだ。
彼女は、その話の間、うんうんと相槌をうちながら真剣に聞いてくれていた。
それで、結局なんだったの？
と彼女は訊いてきたけど、さっきも言ったけどよくわからないんだ、としか答えられなかった。
目が覚めてから、色々と検査されて、やっと歩ける許可が出たのが昨日。
そう――彼女と初めて会ったあの時。
じゃあ、あなたはすぐに出て行っちゃうのかな？
彼女は少し淋しそうだった。
どうだろう？
それすらもわからない。
自分の事なのに。
すると彼女は、そうだ、と瞳を輝かせて言った。
絵を描いて。
次の言葉がそれだった。
絵を描く？
一瞬、彼女の言葉が理解できなかった。
絵を描く……絵を描く……。
えっ？
絵を描く？
自分が？
彼女の？
で、でも……絵を描くっていっても、趣味の落書きみたいなものだし、人に見せるようなものじゃないし、全然下手っぴだし。なんか変な言葉になってきたりしちゃってる？

とにかく、そんな……とんでもない。
思わずあたふたとして、なにを言ってるのか自分でもわからなくなってきた。
その様子を見て、彼女はくすくすと笑う。
う～ん、なんだか笑われてばかりだ。
私は全然絵を描けないから、描けるだけでもすごいと思うよ。
なんて言われると、気が楽になった。
けど……なんだか期待されていないようにも受け取れたと気付いたのはその夜だった。

次の日から、この場所に来る時はスケッチブックが必須になった。スケッチブックは、昨日――絵を描いて欲しいと言われた日のうちに買ってきてもらった。あと、色鉛筆も。
そして、彼女は目の前にいる。地面に座って彼女をじっと見る。
どんなポーズがいいかな？
なんて言いながら、色々とポーズをしてくれる。
両手を頬にあてたり、
両手を大きく広げたり、
腰に手を当てて身体をひねってみたり、
髪をかきあげてみたり、
前かがみになったり、
色々とポーズをするのだけど、どれかというのは決まらない。
どれがいいかな？
と、訊かれてもどう答えていいものかわからない。
そもそも、人物画はあまり描いた事がない。
ずっと一人で描いていたから当たり前といえばそうなんだけど。
写真を見ながら……というのはあるんだけど、こうして目の前に実際にポーズをとってもらうなんて事はなかった。
初めてなのでどうしていいのかわからない。
そうだな……好きなポーズでいいよ。ずっとそのポーズになると思うから楽なので。
そう言うと、
そうだね。
と言い、彼女はフェンスの方を向いて、両手を大きく広げた。
長い髪が風に舞う。
それは――
初めて会った時と同じだった。
思わず見惚れてしまう。
あの時と同じだ。
結構しんどいから早く描いてね。
と言われて、ようやく現実に戻される。

楽なポーズでと言ったのだけど……彼女がそれでいいのならいいんだけど。
とにかく描かないと。でないと彼女はずっとそのままだ。
でも……やっぱり慣れない人物画ってはかどらない。
彼女の負担になっちゃったかな……と後悔。
絵の話なんてするんじゃなかったな……。
後悔先に立たずをこんなに実感するなんて……。
自分にできるのは早く仕上げる事くらいか。なんとか頑張ろう。
なんとか鼓舞するものの、依然としてはかどらない。
どんな感じ？
と、彼女が覗き込んでくる。
正直、描いている途中を見られるのは嫌だったりする。恥ずかしい。
まだ、描きかけだから……。
と、隠そうとしたけど、彼女はばっちりと見てしまっていた。
こんなに上手なのに……隠さなくてもいいじゃない。
なんて言うのは、お世辞にしか聞こえなかった。
私なんて、ホントに全然ダメなんだよ。もうね、小学生の……ううん、幼稚園児の落書きみたいなの。
ちょっと描かせてもらっていい？
と、彼女は返事を待たずにスケッチブックを取り上げた。
そして、しゃがむと、なんとこっちを見て描きだした。
うんうんと唸ったり、こっちをじっと見たりとなにかと忙しそうだ。
しばらくそんな彼女を観察していた。
そして、できた、という声をあげて立ち上がる。つられて立ち上がってしまった。
ほら。
と、彼女は自分が描いた絵を見せてくれた。
……言葉を失った。
前衛的だった。
よく言えばそう。
芸術的すぎて理解できない。
どうかな？
と、彼女は瞳を輝かせて訊いてくる。
どう言ったらいいのだろうか。
人の絵を評価できるような腕前でもないのに評価するなんて……と、なんとか考え抜いた答えがそれだった。
そんなものかな……と、彼女は自分が描いた絵をじっと見る。
それに、上手下手なんて関係なくさ、楽しく描ければいいんじゃないかな。
と、精一杯のフォローをしておく。

とにかく、彼女が喜んでくれて一安心。

さすがに一日では描き上がらず、翌日もあの場所で彼女を描いたっけ。
今となってはとても楽しい思い出。
もしかしたら、一番輝いていた時間だったのかもしれない。
もう……その時間は戻ってこないんだけど。
さて、ちょうど目的の場所に着いた。
携帯の画面を見る。
真っ暗。
どこにも繋がる事のないただの機械。
なんの音もしない。
誰の声も聞こえない。
自分の中だけで交わされた彼女との会話。
ふぅ〜と大きなため息を吐きしゃがみこむ。
目の前の石に手を合わせて目を閉じる。
あれから三ヶ月。
実は記憶というほどの記憶がない。あっという間に過ぎていったように感じる。まるで、あの日から一気に今日という日になってしまったよう。
ゆっくりと目を開け、目の前の石を撫でる。
ひんやりとした感じがする。
さぁっと風が通り抜けていく。
かさかさと笹の葉が啼いている。
ゆっくりと石の裏に回る。
そして、そこに刻まれた自分の名前をゆっくりとなぞる。
三ヶ月ーー
あれから三ヶ月。
もうなにも感じない。
感じても無意味だし。
どうして自分はこんな所にいるんだろう。どうしてここに来たんだろう。
なにもないとわかっていたはずなのに。
石に背を預けて空を見上げる。
きっと暑いんだろうな……なんて、完全に他人事だ。
彼女と出会った空を思い出して、指で作ったフレームで切り取る。
自然と彼女の姿を捜してしまう。
なんだか虚しいな……。

ふわっと風が吹いた。

風に遊ばれた長い髪がフレームをよぎった。

Ｆｉｎｏ.

きみノこえ

http://p.booklog.jp/book/25783

著者：芳田尚哉
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/25783

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/25783